

〔表紙〕  
社倉積穀の大意

一土を司、五穀を守給ふ神を社神とも地神とも云、其社神ニ五穀豊熟を祈て祭日を社日と云、春秋兩度ある也、春ハ其年の五穀成就を祈て祭、秋ハ五穀豊熟の御礼を申て祭、其日を社日と云なり、其社神のために蔵を建造、是を社倉と云、倉ハ今の「米蔵の事なり、春の社日に其年の五穀成就を祈て、先妻作恙なく」取入候初穂を社神江備候心得にて、銘々少々宛も差出置、是則「村寄穀ニ有之候、扱又年々社倉元金の利潤を以、買致候使事及」社神江備奉り候ころへの事故、上の物にて茂なく、下の物ニ而もなく、「社神江相備候ものと相心得、仮令不作年ニ而茂意なく不作相應の寄せ穀」を致し、小前「統の誠を尽候、驗迄ニ、右寄せの内より売丈一二勺たり」とも先社神江相備、其余ハ蔵江積置可申候、先達而も逐一申間候通「社倉 御取立被成候 御主意者、第一ニ凶年飢饉の節 社倉を」開かれ、その穀物を以、窮民を御救可被遊、そのミならず、村方ニ如何様」の事ニ而、飢饉同様の難儀あるへくも不被計候得ハ、左様の節ハ右様穀」御賣附及可有之、只村々疋人たり共因窮ニ及ハす、國富民栄候様ニ被、「思召候上ニ而、寛政二庚戌年始而社倉 御取立被成、遣候事ニ候 平年二ハ何の心茂付間鋪敷ニ候得共、凶年の節ハ何程金銀を持候而も、食物無之候而者、今日の露命をつなき候事ハ不相成候、左候へハ、五穀にまさる宝ハ無之、」大切成物と心得、五穀の冥加を可存事ニ候、専、右の 御主意を以、被遊、「御世話、社倉積穀被、」仰付候事ニ候得者、右之外余事ニ、遣候義無之様ニ、」嚴重ニ取計被、「仰付候間、難有安心いたし、御主意を取らなはず、」己くの上厳密ニ致し、永久相統の心掛第一ニ候、豊年相統候得ハ、」安、をのつから五

穀を粗末ニ致し、金銀をのミ大切ニ致候様に「相成候、去に依て自然と五穀の冥加を忘候様ニ成行候ニ付、地神の憐も」薄冥加にも尽可申候、謔にも濁せざるに井を掘、晴天に雨具を備と、若」渴て井を掘、雨に臨て雨具を求、時は、其急難を防事あたハざるが」如く、常々手当なき時ハ差当手づかへ有之事ニ候、別而人命を救殺物」急ニ得かたき物ニ候得ハ、凶年を忘す、永久安民の基、人々己々が為と存込候て、「油断なく穀物を困置可申事ニ候、社倉年々豊ニ相成候者、此後いか様の」凶年飢饉に逢候迄及餓死に及候事ハ有之間敷、人々安堵も可致」事ニ候、社倉の訣合存込、社神をあがめ祭りて、一卜筋に五穀の冥加を」存候者、地神の加護、産神の冥慮にも叶候て、年々五穀豊熟も可」致、子孫永久に栄候様に可相成、又至て、困窮の者とも非常の手当有之、「末の頼も出来可申候、御領中惣百姓 御救可被遊 御実意の」荒増書附申間候条、此趣小前一統江可申間候

(中略)

右社倉相統の大意者、一村一和之落合に有之候得ハ、万事に響、彌、以永久安民の基とも可相成ニ付、日待等にて小前一統相集り候節ハ、村役人上ニ而不絶為説聞候様可致致者也

寛政十戊午年六月 前橋 郡奉行所

前書之通、古來社倉無之、新規 御取立之村々江申間候、其村々之儀者、先御領主方社倉積穀之訣合、精、申間茂」有之由ニ候得者、小百姓ニ至迄具ニ承知可、罷有候得共、猶亦「去ル戌年より元金御貸附被成、別段厚 思召を以、」御執法被遊、御立候事ニ付、其村々之儀及前書之趣」相守、日待等ニ而小前一統相集り候節者、村役人上ニ而不絶

(後略)